

マルクト広場の複合化についての試論

芦川 智・鶴田佳子

The Study of the Form and Combination about Markt

Satoru ASHIKAWA and Yoshiko TSURUTA

This report is that the form of Markt is analyzed, and the system of combination is examined, and this is the thesis to explain the general idea of Markt.

Markt that means market place is the important space on the center of city in Germany and German circumference countries, Poland, Czech, Baltic republics, Benelux three countries, Switzerland and Austria. Markt is located in the center of old town, and keep important position for urban function up to present.

(1) はじめに

この試論は生活機構研究科紀要 vol. 9 「ドイツのマルクト広場の類型」をうけて、さらに発展させる目標を持った試論である。それゆえ、ドイツにおけるマルクトの分布や、その形態については前論にゆだねる。当論においては、さらに広い地域に広がるマルクトの概念を有した、都市センター空間としてのマルクト相当概念を有する対象について展開する論と位置付ける。

(2) マルクトという言葉

マルクトの言葉は各国で若干異なる。たとえば、ポーランドでは少し違った呼ばれ方、すなわちリネックと呼ばれるが、基本的な構成の仕方は同じである。ベネルクス3国もマルクトと呼ばれてドイツと同じ形式である。ドイツ国内のマルクトも呼ばれ方は多様である。

Am Markt (アム・マルクト)、Fishmarkt (魚市場)、Größer Markt (大市場)、Grüner

Markt (グリーン・マーケット)、Hauptmarkt (中央市場)、Holtmarkt (材木市場)、Hühnermarkt (鳥市場)、Kohlenmarkt (炭市場)、Kornmarkt (穀物市場)、Krautermarkt (スパイス・マーケット)、Naschmarkt (甘いもの市場)、Obermarkt (上の市場)、Obstmarkt (果物市場)、Prinzipal-markt (中央市場)、Pferdemarkt (馬市場)、Stadtmarkt (都市の市場)、Weinmarkt (ワイン市場)、Wenigemarkt (お買い得市場) など単にマルクトから、形容詞のついたマルクトあるいはマルクトプラッツというように広場がついたものまで都市によって異なる。

さて、都市の中で、市の立つ場は、世界中どこでも共通に存在する。というのも、市場に相当する名前は地域によって異なるが、必ず存在しているからである。その全体とはいかないまでもその大要を示すと以下ようになる。

Markt (ドイツ語)、Markt (オランダ語)、Rynek (ポーランド語)、Targ (ポーランド語)、

Trh (チェコ語)、Trziste (チェコ語)、Marche (フランス語)、Piata (ルーマニア語)、Plaza (スペイン語)、Mercado (スペイン語、ポルトガル語)、Feira (ポルトガル語)、Piazza (イタリア語)、Mercato (イタリア語)、Praca (ポルトガル語)、Trg (セルビア・クロアチア語)、Trgovina (セルビア・クロアチア語)、Pijaca (セルビア・クロアチア語)、Çarşı (トルコ語)、Pazar (トルコ語)、Αγορά (ギリシャ語)、Пазар (ブルガリア語)、Piac (ハンガリー語)、Bazaar (英語)、Fair (英語)、Market (英語)、Souq (アラビア語)、Bazar (ペルシャ語) などである。もちろん日本語の市場もここにはいる。これらのマルクトに相当する言葉は世界各地に存在し、それが都市の魅力となっているところはたくさんあるが、ドイツを中心とするマルクトは他と少し様相が異なっている。例えば、イタリア語のMercatoは、いわゆる市が立つ広場あるいは施設であるが、その都市のセンターとしての機能は無いものが多い。一方ドイツ語のマルクトは、都市のセンターを構成するものが存在し、複数のマルクトが存在する都市でも、その中に都市のセンターとなるマルクトが必ず存在しているのである。つまり、神聖ローマ帝国時代に帝国が認めた自由都市を帝国都市と呼び、自立した都市運営を行うために、貿易を興し、商業都市として経済基盤を確立した都市づくりを目指した中世の都市像において、マルクト建設が重要な課題であった事を認識できるのではないだろうか。

都市形成の過程には様々なケースがあると同時にその核をなすマルクトに関しても幾つかの形成過程が見られ、現在の形態においても違いが現れている。E.A.Gutkindによると、南西ドイツでは12世紀以降、市場のための特別な空間が生じはじめ、その後商業の発達に伴い商業機能を有するマーケットストリートや複数の通

りが交差する空間が拡張されていった。通りの拡張ばかりでなく13世紀になると計画性が著しくなり、独立した整形の市場広場が形成され広場と通りが共存するが、次第にマーケット機能を有していた通りはその機能が薄れ、他の通りとの区別がなくなり都市の中心を担うマルクトは広場へと移行していったというのが主流であるとしている。矢守一彦はE.A.Gutkindの述べているこのようなマルクトの変容系列、つまり街路状のマーケットストリートから面的なマルクト広場へと変容していった流れを定説とすることは一般的であると捕らえつつも、面的な広場形態へと移行せず、街路状の形態を維持し続けた事例もあることを明記している。また東方の植民建設都市に関して、方格状街路網の中央マルクト広場が平坦という地形的条件を利用し典型的に展開していったとしている。

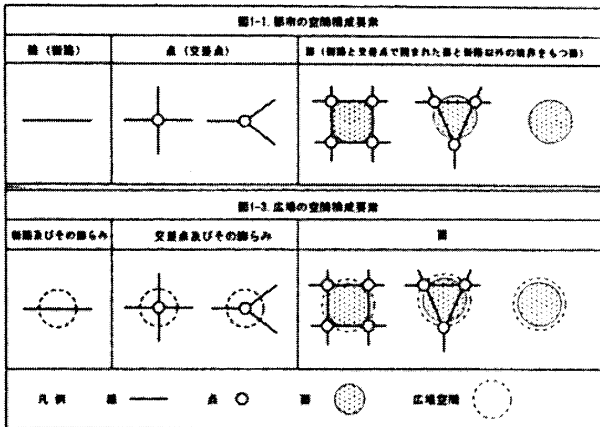
さて、一方でドイツ以外の都市についてはどのような変容がなされてきたのであろう。ベルンに代表されるツェーリンガー家が司った都市は、既存の定期市の開かれる農村集落をそのまま利用し、定期市の利権目当てに有力商人を勧誘し都市建設をしてきたという経過からその市の立つ通りを中心に発達し、現在もその通り状の形態を保つマルクトが多い。ここでこれらの流れを踏まえた上でドイツ周辺諸国で現在も機能しているマルクトについてその形態を分類すると、街路の形態をとるものと面的な広がりをもつ形態のものにまず大きく二分することができる。永松栄は広場の形態を「路線膨らみ型」「交差点膨らみ型」「街区抜き取り型」の3種類に分類しているが、マルクトの平面形態をその構成要素の組み合わせから検討すると街路と交差点という基本要素が考えられ、本論ではそれら基本要素の組み合わせ及び変容の可能性から平面形態を5種類に分類し、以下に類型を試みる。

(3) マルクトの種類

1) 平面形態の種類

まずこの街路と交差点という基本要素で広場構成を検討する前にこれらの要素をもって都市空間を表現し得るものであるかを確認した上でそのセンター構造である広場の構成へと下記の手順で進めてゆく。

表1：空間構成図



- ① 第1ステップ：一般的に都市の空間構成は街路(線)と交差点(点)及び街路と交差点によって囲われた街区部(面)に要素を分けることができる。ただし、この街区部は街路と交差点だけでなく、川や山といった自然要素や城壁等の構造物によって囲われた場合もあるが、ここではそれらも含め街区部と呼ぶこととする。つまり、表1-1に示されるようなモデル構成図で単純化できると思われる。
- ② 第2ステップ：図で示される都市モデル構成図に対して、マルクトが位置づけられる部分についても街路、交差点、街区部の3部分による構成が考えられる。
- ③ 第3ステップ：都市の街路構成にマルクトが割り当てられた場合にその部分が空間的に広がりをもたされ、マルクトの機能を十分に活かせるように改造されることが考えられる。つまり、表1-2で示す

ように、街路の場合には通常の幅員から広がりをもった幅員に改造され、交差点の場合には通常の交差点より広がりをもったものに改造されるなどである。

- ④ 以上の3ステップの考え方に従ってマルクトの平面形態のモデルを考えると次の5つのタイプが導入される。

表2：広場形態の5分類

広場の形態図	
	I 街路型 街路がそのままほぼ同じ幅員をもったまま通りの形態を保ちマルクトとして機能しているもの
	II 街路ふくらみ型 街路が部分的にふくらみもち、変形しつつも全体としては通りの形態をもつもの
	III 交差点型 複数の街路の交点がマルクトの機能を有するもの
	IV 交差点ふくらみ型 街路の交差点がふくらみもち、マルクトとして機能しているもの
	V 面型 街路と交差点の組み合わせであり、街区抜き取り型とも言い換えられる

上記の5種類は単純形であり、実際の事例に対応させるとこれらを組み合わせた複合形態も見られる。

2) 中心施設と平面形態の関係

次に前述の5つの形態と合わせてマルクトに面する主要施設の配置についても考えてゆく。概してマルクトは商業施設や住宅によって囲まれているものであるが、その広場を取り囲む施設内に中心となる施設が配置され、その施設の性格により広場の特徴が定まる場合が多く見られる。中心となる施設とは具体的に教会、新・旧市庁舎、その他(ギルドハウス・裁判所・博物館等)である。前述の5種類の平面形態に対して、中心となる施設の配置によってその広場の類型を検討してみる。配置の仕方の判断基準として、施設の正面性と広場の中心性の2条件

の対応関係で捉えることとする。施設の正面とは、主要な出入口が配置されている面を指し、広場の中心施設とは、広場に主要な出入口が面しているものと捉える。また、広場の中心性は、不整形の広場の場合には中心軸の配列を規定することが難しいが、整形の広場について軸線が配置され、その軸線と施設配置が重なっているときに施設が広場の中心に位置していると判断する。正面を向けている施設について、広場空間の中心となっているのか、広場空間の中心からははずれているのか、それとも広場空間に内包されているのか、さらにはそのような中心となる施設がないのかという4つの配置パターンに分類できるであろう。この条件を下に5つの広場形態と中心施設の配列によって図に示すような類型リストを導入することができる。

表3：広場形態と広場に正面を向けている中心施設配置による広場類型図

広場の形態	中心となる施設が無い場合		中心となる施設が広場に面する			
	A	B	C	D		
街路型 I	A-I	B-I	C-I	D-I		
圓形ふくらみ型 II	A-II	B-II	C-II	D-II		
交差点型 III	A-III	B-III	C-III	D-III		
交差部ふくらみ型 IV	A-IV	B-IV	C-IV	D-IV		
扇型 V	A-V	B-V	C-V	D-V		

●：中心となる施設 ○：広場空間 ≡：街路空間

3) 事例のはり付けと類型の意味

表3で示した5つの平面形態と中心施設の配列に関して具体的な事例に当てはめた際に対応するか否か、概念上の類型を検証してみる。1990年、1998年、1999年、2000年の4回にわたって実施した都市広場調査データ223事例中、本論のマルクト概念に相当する広場を抽出したところ95事例が該当する。本論のマルクト概念に相当する広場とは、現在も都市のセンターとして位置し、市場機能を有するあるいは有していた広場を指すものとする。この95事例を平面形態と施設配置から分類すると表1のようになり、3分の2以上がV:面型に当てはまり最も数が多く、逆に交差部型の実例数はゼロであった。(表4-1~4-4 95事例のタイプ分けの一覧表参照)

4) 考察

マルクトの平面形態を街路と交差点という基本要素およびその空間に対する主要施設の配置から概念上20タイプに分類してきた。これに対し、具体的に95事例を対応させた結果、表4-1~4-4にみられるように面型が圧倒的に多く、65事例あり、次いで交差部ふくらみ型15事例、街路ふくらみ型12事例、街路型3事例、交差部型は該当事例なしであった。95事例中20タイプのいずれにも該当しないという事例はなく、事例は全て対応させることができた。平面形態の類型において交差部型が該当事例なしであったのは、街路の交差点という「点」ではマルクトの機能を担うには不十分であり、面的な広がりのみならず線的な空間の拡張の場合にしてもマルクトはある程度の空間の広がりが必要であるということを示していると考えられる。この点で、調査の仕方に問題があったか、もともと交差部型が無いのかのいずれかであるが、広場としての機能が単なる交差点には貼り付けにくいというのが妥当なところではなかろうか。マ

表4-1 95事例のタイプ分けの一覧表 その1

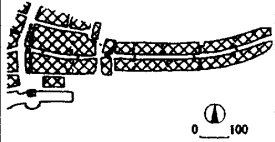

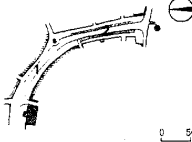
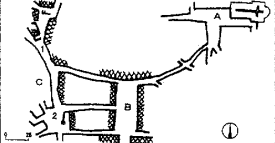
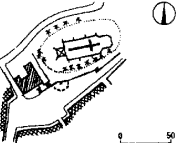
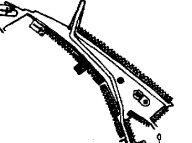
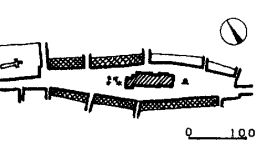
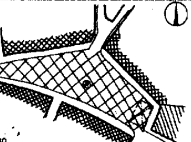
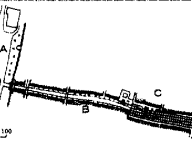
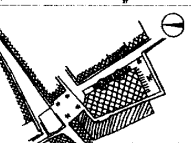
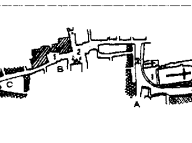
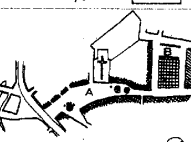
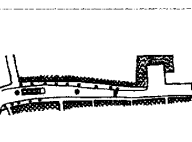
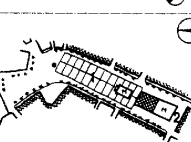

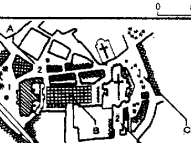
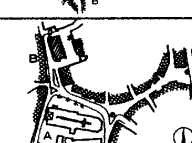
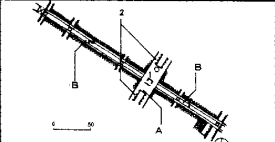


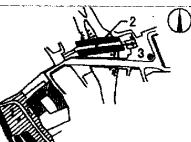
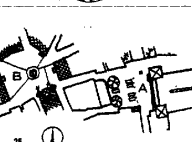
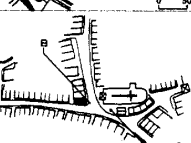

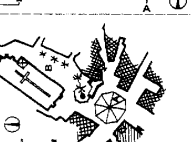
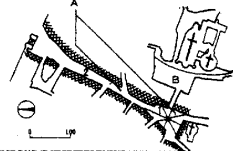
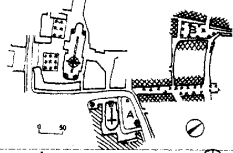
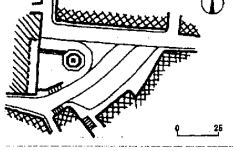
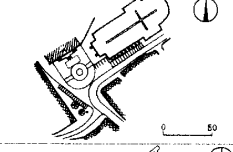

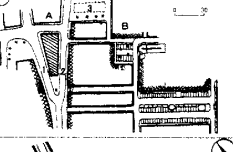
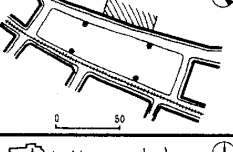
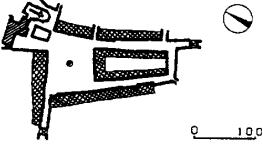
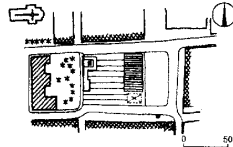
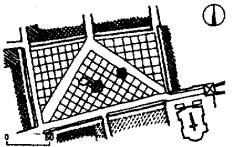
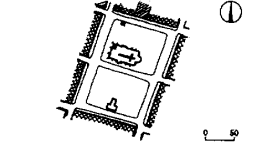
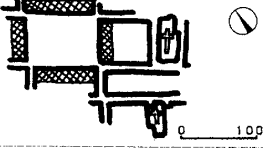
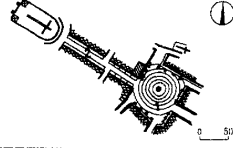
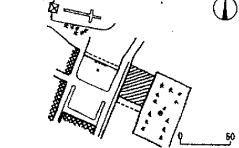

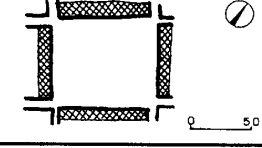
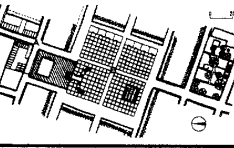
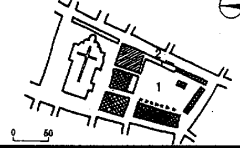
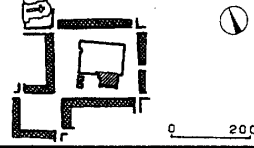
広場の形態	広場に配置された中心施設	中心となる施設が広場に面して一つ存在する			
		中心となる施設が無い場合 A	中心となる施設が広場の中心に位置する B	中心となる施設が広場の中心からずれて位置 C	中心となる施設が広場に内包されている D
I : 街路型					
II : 街路ふくらみ型					
					
					
					
					
					
IV : 交差部ふくらみ型					
					
					
					

表4-2 95事例のタイプ分けの一覧表 その2

広場に配置された中心施設 広場の形態	中心となる施設が無い場合 A	中心となる施設が広場に面して一つ存在する		
		中心となる施設が広場の中心に位置する B	中心となる施設が広場の中心からずれて位置 C	中心となる施設が広場に内包されている D
IV: 交差点 ふくらみ型				
				
				
				
				
				
				
V: 面型				
				
				

広場形態図の凡例

- 市庁舎・タウンホール等の行政関係施設
- 市庁舎以外の公共建物
広域行政施設・警察署・郵便局等
- 広場内の彫像やモニュメント
- 広場内の特種的な格状の建物・構築物
- 建物化された商業施設
- 緑地などの自然物；植栽、芝生など
- 宮殿・露などの建築施設
- 泉
- 城郭・城壁（現存するもの）
- 城郭・城壁で過去にあったと考えられるもの
- 河川・遊水などの水面
- 教会・聖堂建築物
- 歩行者と車の領域区分線（段差などで物的に設置されているもの）
- 博物館・美術館
- アーケード形式（ボルティコ）の部分
- 鉄道および駅

表4-3 95事例のタイプ分けの一覧表 その3

広場の形態	広場に配置された中心施設	中心となる施設が無い場合	中心となる施設が広場に面して一つ存在する		
		A	中心となる施設が広場の中心に位置する B	中心となる施設が広場の中心からずれて位置 C	中心となる施設が広場に内包されている D
V: 面型					

表4-4 95事例のタイプ分けの一覧表 その4

広場の形態	広場に配置された中心施設	中心となる施設が無い場合	中心となる施設が広場に面して一つ存在する		
			中心となる施設が広場の中心に位置する	中心となる施設が広場の中心からずれて位置	中心となる施設が広場に内包されている
		A	B	C	D
V：面型					

広場形態図の凡例

- 市庁舎・タウンホール等の行政関係施設
- 市庁舎以外の公共建物 広域行政施設・警察署・郵便局等
- 広場内の彫像やモニュメント
- 広場内の特徴的な構造的建物・構築物
- 建物化された商業施設
- 緑地などの自然物：植栽、芝生など
- 宮殿・館などの建築施設
- 泉
- 城郭・城壁（現存するもの）
- 城郭・城壁で過去にあったと考えられるもの
- 河川・遊水などの水面
- 教会・聖堂建築物
- 歩行者と車の領域区分線（段差などで物的に設置されているもの）
- 博物館・美術館
- アーケード形式（ポルティコ）の部分
- 鉄道および駅

ルクトが立地するためにはいくらかでも広がりが必要であろうとする観点が求められるのかもしれない。しかし、今後の調査によってこのような論理的なモデルが発見されることもあるので当面枠組みだけは残しておくこととしたい。

一方、主要施設の配置であるが、いずれの平面形態の場合も主要施設が空間の中心軸上に位置するものの比率が高く、これは計画的に施設や空間が形成されてきた事例が多い現れであろう。また、施設が内包されている事例は面型22事例、街路ふくらみ型1事例、交差部ふくらみ型、街路型、交差部型は該当事例なしであり、空間に施設が内包されるためにはある程度の広がりが必要であり、面型の特徴のひとつであるということができる。全体を通して事例数が少なかったのは中心となる施設が存在しないものである。市庁舎や教会がなく、商業施設が並ぶ事例が多い。マルクトの場合、元来の主要機能が市場機能であるため商業機能が他の行政や宗教機能よりも色濃い場合も多く、ここでの商業施設は単体ではなく複数並ぶ形態がほとんどである。つまり、中心施設の存在しないという図中Aの縦軸は商業施設の連なる均質的な空間を形成しているグループと言い換えることができる。平面形態のみから類型を判断することが難しい事例や主要施設の選定と配置の認定が難しい事例も若干あったが、本類型に事例をあてはめることにより上記のようなマルクト形態の特徴を読みとることもでき、点、線、面からなる平面形態と主要施設配置による本類型がマルクトの類型化手法として妥当であるとみなし、今後、マルクトをもたない他地域の商業空間についても適応させてゆきたい。

(4) マルクトの複合化についての試み

1) 広場の複合化についての考え方

表に示した95事例の中で、ドイツ、ポーラ

ンド、チェコ、ベネルクスの事例としてあつかったマルクトと呼ばれる、あるいはマルクトの意味を担った68事例について、その平面形態的特徴によって整理したものがマルクトの類型図である。(図1：マルクトの類型図参照)

この類型図では街路型、街路ふくらみ型、交差部ふくらみ型、街区型の4つのタイプを基本としているが、最終的に整理した図は、3つに大きく分かれることが示される。つまり、街路型、街区型そして複合型の3つである。街路型は街路型、街路ふくらみ型を含み、街区型は面型を示し、交差部ふくらみ型は数が少ないためか、複合型あるいは街路型に組み込まれた。この枠組みからはずれる小都市型は、都市の規模的にも、広場の規模的にも同列には並べがたいタイプとしてとりあえず分類からは外してある。

2) 街路型・街区型

さて、複合型が、生まれた背景としては、ポーランドやチェコのように単一的で明解な形態を有しているものと比べると、ドイツの場合は、その形成過程から考えても複雑な過程があることから、複数の形態の連携するような形態が多いために、単純に街路型、街区型と区分できない内容がある。そこで複合型という概念を導入せざるを得ない結果となったのである。問題は、複合型という類型が今回生まれてきたという点である。その中には、街路型と街区型が連携配置される街路・街区複合型と、複数の街区が複合して作り上げられる複合街区型とに分かれる。つまり、単一の広場で構成されるセンターより、複数の広場が連携配置されて構成されるセンターの方が多く、それが一つの類型を作り上げるとのことである。

そして、街区型には多様な類型が混在していることがわかった。つまり、単純な街区型で核となる施設が配置されている街区核型と、核となる施設を広場内に内蔵する核内蔵街区型、そ

図1-1 マルクトの種類図その1

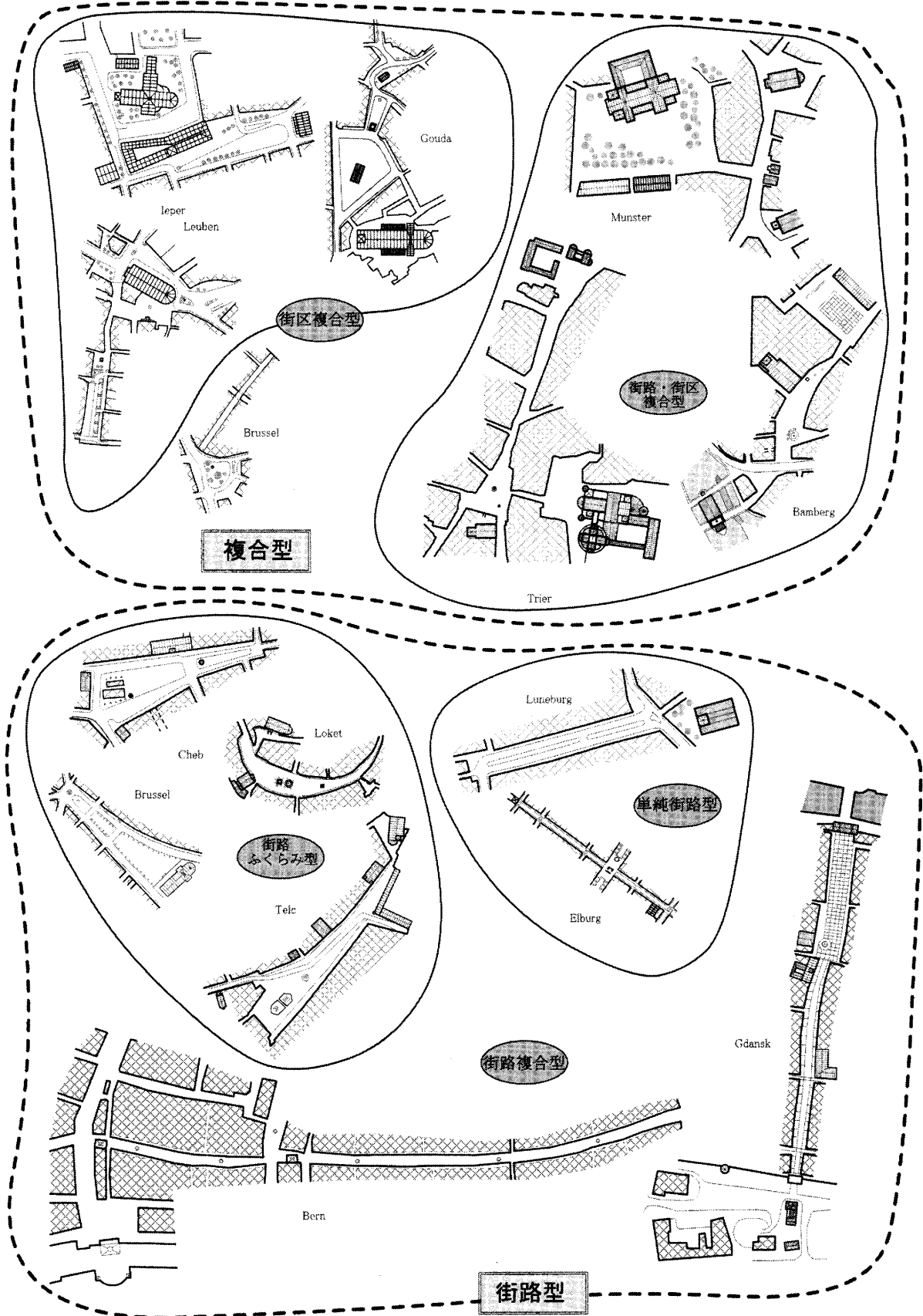
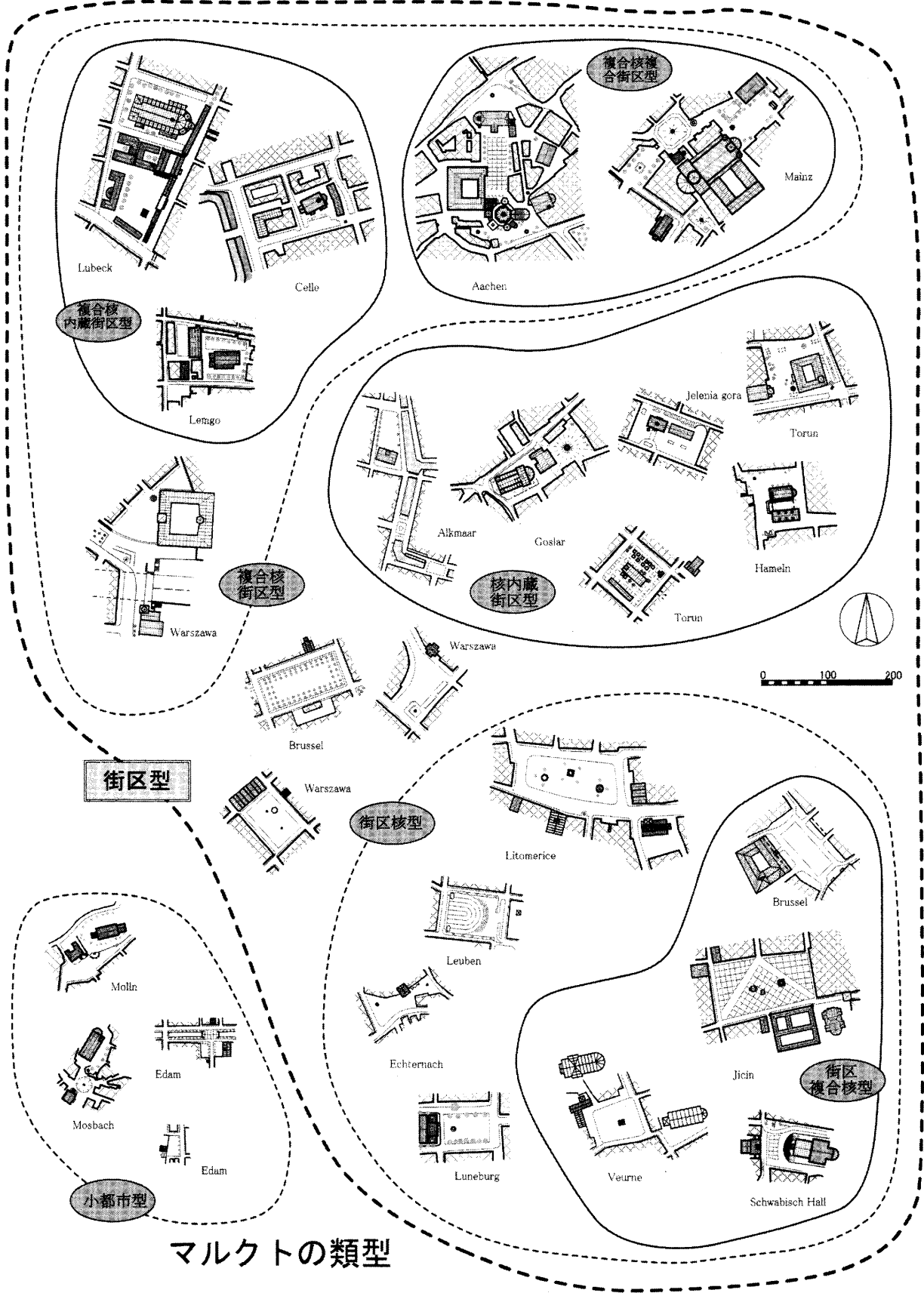


図1-2 マルクトの種類図その2



マルクトの種類

れに、核となる施設が複合的に存在する複合核街区型の3つに分類される。そして、最後の複合核街区型の中に複合的に配置される核となる施設を大きな街区で内包していく複合核内蔵街区型と、複合的な核施設と、複合的街区が対応する複合核複合街区型に分かれる。今回の最終類型図として整理したものの中でこの最後の複合核内蔵街区型と複合核複合街区型の二類型は、平面類型を追っていったら始めて導き出されたものとなっている。

3) 複合化についての考察

複合化について今後検討していかなければならない点はいくつかある。まず第1に、複数の要素で構成される広場形態を対象としたときにいずれをメインとして捉え、いずれをサブとして捉えるかという判断である。第2は、複数の要素で構成されているものについていくつかの部分に区分できるか否かの判断である。このことは、一つの広場をどこで区切るかに関わる問題でもある。いずれにせよ、複合がどのようなメカニズムでなされているかを判定していく手法が必要であろう。

(5) おわりに

当論では、マルクトあるいはマルクト相当の広場を対象としてドイツを中心とした地域の都市広場を扱った。広場の機能としてはある程度のまとまりを有する判断をなせたと評価しているが、複合についての判断についてはまだ曖昧な点が多く、これから複合についての判断手法の開発が望まれよう。

参考文献

- 1)E.A.Gutkind, URBAN DEVELOPMENT IN CENTRAL EUROPE,1964
- 2)E.A.Gutkind, URBAN DEVELOPMENT IN EASTERN EUROPE : POLAND, CZECHOSLOVAKIA, AND HUNGARY, 1972
- 3)E.A.Gutkind, URBAN DEVELOPMENT IN WESTERN EUROPE : FRANCE AND BERGIUM, 1964
- 4)E.A.Gutkind, URBAN DEVELOPMENT IN WESTERN EUROPE : , 1964
- 5)E.A.Gutkind, URBAN DEVELOPMENT IN ALPAIN AND SCANDINA
- 6)Françoise Divorner, Bern und die Zähringerstädte im 12.jahrhundert, Bernteli Verlag Bern, 1993
- 7)矢守一彦、都市プランの研究、大明堂、1970
- 8)永松栄、ドイツ中世の都市造形、彰国社、1996
- 9)河原温、中世ヨーロッパの都市世界、山川出版社、1996
- 10)WOLFGANG BRAUNFELS/日高健一郎 訳、西洋の都市 その歴史と類型、丸善株式会社、1986
- 11)マルクト、市の立つ広場その1,2,3, 造景No.27,28,30、建築資料研究社、2000年6月、8月、12月号